
夢の声とあいつと俺

ゆうが

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢の声とあいつと俺

【Nコード】

N2908E

【作者名】

ゆうが

【あらすじ】

俺は気楽な一人暮らしの大学生。お隣の女子高生になぜか気に入られ、振り回されている。俺は俺で彼女に話せない秘密があり…

いつもの訪問（前書き）

ラブコメのつもりで書いていますが、はたしてどうなるか！？
ライト現代ファンタジー恋愛ノベル（ながつ）です。

連作短編で、時系列は前後します。一応、最初から順番に読むのが一番おすすめです。

いつもの訪問

『起きなっ』

“声”がした。どうもソファで眠り込んでいたらしい。ぼーっと起きあがる。朝の寢覚めほどではないが、一瞬周りが認識できない。気づいてみると、反復される音が聞こえてきた。ノックだ。ドアに目を向けるが、半分開いている。そして、その向こうには誰もいない。不思議に思っているうちに、ノックの音が激しくなってきた。コンコンがドンドンに。

どうもやつと本格的に頭が回転し始めたらしい。音の出所を判別し、そつちを見た。要するに窓だ。この窓はガラス戸の外側に木で作った戸がついている。目的は雨戸のようなものだが、洋風なので開き戸になっている。

近づいていって声をかけた。

「何やってるんだ？」

「あゝ、やつと返事したあ」

窓の向こうから元気な声が響いた。門を抜いて、窓を開けてやる。きらきらした元気な瞳がこちらを向いていた。こちらの窓からわずか1mのところにある、別の窓から覗く顔はなかなかの美少女。不本意ながら見慣れてしまった小柄な姿。

「よつと」

小さくかけ声をかけて、向こうの窓の縁を乗り越えてくる美少女。屋根に降り、こちらの窓枠に手をかける。

「またか？」

「シヨウウったら冷たい〜」

といいつつ、こちらの窓から侵入してくる。俺はちょっと脇によけ、手を差し出した。つかんだ手を引っ張り、手助けする。

「シヨウウ優しいー！」

前音を簡単に翻し、窓から入ってくる。ふわりと石けんの香りが

漂う。風呂上がりだと見える。若草色の生地にウサギが跳びはねているパジャマ。相変わらぬ姿だが、ちょっとあきれられる。

「はあく、やっぱりこっちは広くて居心地がいい!」

「あのなあ、自分の家から来ておいて、その言いぐさかい」

「だってえ、私の部屋なんて狭いんだよ?」

俺はちらりと窓の外を見た。すぐ向こう側には六畳ほどの部屋。机とベッド、本棚があり、所狭しとぬいぐるみが置いてある。いわゆる女の子の部屋ってやつだ。自分のいる部屋を眺めてみる。十畳ほどのフロアリングに今はソファ型になっているソファベッド。まあ、確かに広い。ただ、取り柄はそれだけだ。ほとんど家具も何もない部屋。

「今日は何を淹れてるの?」

またきらきらした瞳で見えてくる彼女。

「ジャスミンティー」

一言答えて、階段に向かった。とことこと後ろをついてくる彼女にとつて、俺の家はすでに勝手知ったる他人のうち……というわけだ。

改めて湯を沸かし、お茶を入れ直す。殺風景な家だが、食器や炊事道具はなかなかいいものをそろえているのだ。中華風の茶器一式をお盆に乗せ、対面式の台所から彼女の位置を確認。リビングルーム隣の、お気に入りの和室に陣取っている様子もいつも通りだ。テーブルにお茶を置く。

「ありがとう」

気楽に答えた彼女にひらひらと手を振ると、俺はリビングルームに引き返した。ソファに沈み込むように座り、リモコンでテレビをつける。家庭用としては最大クラスのテレビから、始まったばかりらしい洋画が流れる。画面にあまり注意を払わないまま、お茶をすすった。

「シヨウってばさあ」

気がつくのと、耳元から声がした。生返事を返す。少女はソファの

後ろに座り込み、顔だけをソファの背もたれに乗せていた。息がかかるほどに近い距離。

「絶対家は大金持ちだよね〜」

「そんなことないさ」

「いや！ 絶対大金持ちだ。こんな大きな家に一人住んで、こんなでっかいテレビ持ってさ。すごい仕送りがなかったらやっつられないじゃない」

「俺は金銭面も含めて自活してるぞ？」

「はいはい」

全く信じていない表情。確かにそうだろう。おそらく建築家に依頼したと思われる洋風の二戸建て。それぞれの部屋は最低10畳以上。対面式のキッチン。シャンドリアがかかったリビングルーム。大学生のすみかではない。借家とはいえ、社会人としてもかなり裕福な部類でないと借りられないだろう。お隣さんである彩華の家よりもかなり大きいのだ。

おっと、言い忘れていた。俺の名前は狭山翔一郎。さっきから俺のことをショウと呼び捨てにしている美少女は隣の家の住人、明星院彩華。みょうじんあやか名前だけは華麗だが、家は単なるサラリーマンで、華族に連なる家系でも何でもないらしい。実際のところ、俺の方が断然貴族的な生活スタイルなのだ。

「お代わり」

耳元でささやく言葉は色っぽくも何ともない。俺は立ち上がり、テーブルにのっていた空のカップを取りに行った。お茶のお代わりを淹れ、彩華の元に持って行ってやる。彼女はどこから取り出したのか、参考書とノートを広げ、勉強していた。

「えらいな」

「一応やっておかないとね。これでも進学校なんだしね」

彩華は県内でも有数の進学校に通っており、成績もトップクラスなのだそうだ。以前無理矢理見せられたテストの結果を見ても、間違いないようだった。

じゃまするのも悪いので、改めて映画に注意を向ける。画面の中では悪人が陰謀を進めている。自分のお茶をすすりつつ、しばらくの間映画を見ていると、のびをする声が聞こえた。

「おっしまい」

映画が終了していたということは一時間以上たっていたということだ。俺はまたも立ち上がり、お茶を入れ直す。今度はクッキーなどを添えて、彩華の元に運んでやった。

「終わったか」

「まあね、今日はこのくらいで十分かな」

彩華の対面に座り、片づける彼女を眺めた。肩より少しのばしている黒髪は後ろでまとめてあり、黒目がちの大きな瞳にはコンパクトな縁なしめがね。卵形の顔にめがねをかけると、いつもと異なる知的な印象だ。ノートを片づけると、彩華はめがねを外してこちらを見た。

「めがね姿に惚れた？」

「アホか」

鼻で笑うと、ちょっと傷ついた表情になる。

「ひどーい。私のめがね姿が好きだっていつてくれる男子だって何人もいるのよ」

「そりやまたすごいな」

「信じてないでしょ？」

「いや、信じているには信じているけどな」

まあ実際、彩華はかわいい。町を歩いていると十人中九人が振り返るのではないだろうか。派手なタイプではないが、顔立ちは非常に整っているし、何よりもその瞳が人を惹きつけるのだ。

「それより家に帰らなくていいのか？」

「まだ11時じゃない」

「あのかなあ」

と俺。まあ、この問答も何回やったのか、もはや覚えてもいないのだが。

「高校生のな、女の子がな、11時にな、男の家にいるなんて変だろ？」

「そっかなあ!？」

「絶対変だって」

「でも、カナタちゃんも朱美ちゃんも彼氏がいるっていったし、その人は大学生だっていったし、お泊まりもするっていったよ？」

「俺はおまえの彼氏じゃない」

「え〜!？」

「だからこんな時間にいたらおかしいだろ？ だいたい、家の誰かがおまえの部屋に入ってきたらどうするんだよ」

「勉強のじゃまはしないっていつてるし、来たりしないよ。だいたいちちゃんと勉強してるんだし、問題ないでしょ？」

問題はありまくりだが、確かに今まで見つかったことはない。家族が来ないというのも本当だろう。まあ、実際のところ、彩華は夜にはほとんど俺の家にいるといっても過言ではない。文字通り、入り浸っているっていいだろう。広いだけで殺風景な俺の家のごがいのやら。

良しにつけ悪しきにつけ、俺の夜はこんな感じ。そして、俺と彩華もこんな関係なのだ。

散歩の謎

玄関をでて、鍵をかけた。

「なかなかいい天気だ」

呟いて、家から歩き出す。家の前の階段を下り、門を開ける。

「あゝっ！」

聞き慣れた声。そっちに顔を向けると、ブレザーにスカート、濃いめの青色の

制服に身を包んだ女子高生。明星院彩華みょうじょうさいかという名前

と比較して顔立ちはおとなしいが、他に類を見ないほどの美少女。特に目を引く

のは、きらきら光っているかのように見える瞳。

「シヨウだ」

といつつ駆け寄ってくる。

「今帰ったところか？」

「うん」

「そっか。じゃあ、またな」

といいながら歩き出そうとする俺。彩華はいきなり走ってきて、俺の前に立ち

ふさがった。腰に手を当てこちらを見据える。

「相変わらずシヨウは冷たいなあ。こんな可愛い子に呼び止められたんだから、

少しはお話くらいしていてもいいじゃない」

「俺は今から出かけるところなんだが？」

「どこへ？」

「…散歩」

一瞬詰まるが、無難な答えを返す。

「そっかあ」

「じゃあな」

「うんうん」

歩き出した俺はすぐに立ち止まり、振り返る。

「あのな…」

ついてきていた彩華は首をかしげた。

「何？」

「何じゃないって。今帰ってきたところなんだろう？」

「うん」

「家に入って着替えないとだめだろう？」

「だめ？」

「そりゃそうだろう」

「絶対に？」

「まあな」

「どうしても？」

「…そりゃまあ」

この問答の意味がすでにわからない。

「私は別にこのままでもいいんだけどなあ」

「制服でうろろするなって、学校でいわれるだろう？」

「学校はともかくっ」

「…うん？」

「シヨウはそうした方がいいっていつのよね？」

「ああ」

「よしわかった。着替えてくるっ」

「それはよかつ…」

「だから、着替えてくるまで待つてて」

といいざま、彩華は家に駆け込んでいった。残される俺。

「…ちよつと待て。着替えるのはともかく、何で俺が待たないといけないんだ？」

とってはみるものの、目の前にいた美少女は家の中。そこで見捨てて行って

しまえばいいのだが、それもちよつとやりづらい。結果として、俺

は20分あまり
を彩華の家の前で立ちつくすことになった。

「おつまたせ〜」

弾んだ声とともに彩華が家から駆け出てきた。いつも思うが、この少女は元気が

あふれている。いわゆる才色兼備系の雰囲気ではないのだが、実際は成績もよく

顔立ちもいいという。しかも、周りにやっかまれたりもしないらしい。天下無敵の

美少女である。

「どこ行くの？」

「ん〜、わからん」

「なんなのよ〜？」

「散歩だからな」

答えて歩き出す。彩華の今の服装は、緑色のワンピースに淡い色のブラウス。

後ろでまとめた髪はリボンを付けている。とことこと後ろからついてくる。

「シヨウ、足が速い」

「これがふつうだ」

「もう少しゆっくり歩いてよっ」

「ついてこいって頼んでないぞ」

「もう〜！」

見えないが、少しふくれっ面をしているであろう彩華。俺は少し歩く速度をゆ

るめる。彩華は早足で俺の隣に並ぶ。

「いい天気ね」

「まっただくだな」

「散歩日和だ」

「…ああ」

俺は他のことに気をとられていた。

『そこだよ』

ささやく“声”。

「え、ここなのか？」

「ここって何？」

彩華が聞き返す。俺は首を振った。

「なんでもない」

「変なの」

『ここだよ』

俺は立ち止まる。古い民家の汚い塀。その角のところにお守りが落ちている。

俺はそれをそっと拾い上げた。まじまじと眺める。古いお守りだ。泥を軽く払

い、文字を読もうとするが読めない。漢字…のはずだが、読めない。

「それ、誰かが落としたのかな？」

「…違う」

「なんでわかるの？」

「なんとなくだ」

「変なシヨウ」

俺にはこのお守りの価値はわからない。しかし、それが大事なものであること

はわかる。そうでなければ俺はここにはいないはずだからだ。

「帰ろうか」

「え、もう!？」

「用事は済んだ」

「散歩じゃなかったの？」

「散歩だ」

「少ししか歩いてないよ？」

「もう飽きた」

彩華はけらけらと笑う。

「もう！？ 飽きっぱいシヨウ」

くるくると表情が変わる彩華を少し見つめる俺。

「こついうのも悪くないかもな」

つぶやきに反応する彩華。

「なにになに？」

「なんでもない」

「またあ、いつもそればかり！」

言葉を背に、歩き出す。本当にこついうのも悪くない。

声と俺（前書き）

けっこうとりとめがなくなってしまうています。
小説書くのって難しいですね。

声と俺

俺は車で町中を走っていた。別にドライブをしているわけではない。目的は大学だ。知つての通り、俺は大学生。きわめて勤勉な：とはお世辞にも言い難いが、さぼって留年するのもバカバカしい。それなりに出席する必要があつた。

狭い駐車場に車を入れる。郊外にある大学なので、駐車場だけはきちんと整えている。ショッピングセンターなどの駐車場と比較すると、いろいろと文句もあるが、無料だし、学校に付属している駐車場に細かいことを言つても始まらない。

駐車場のすぐそばにある学部棟に向かい、エレベーターを見る。幸いにも一階に止まっている。中に入り、五階のボタンを押す。扉が閉まりかける。…と、その隙間から手が出てきた。扉が検知して、再度開いた。

「ふう、間に合った間に合った」

中に入ってきたのは白衣姿。白衣といっても、医者や看護師のそれではない。実験に使う白衣だ。少し乱れている髪を手櫛で整えている姿からも女であるとわかる。

「よう、翔一郎」

にっと笑つて、片手を軽くあげた。言葉遣いは男っぽさ全開の、この女の名前は宮雪早苗という。

「久しぶりだな」

「全く久しぶり、なんてもんじゃないよ。文系じゃあるまいし、もう少し研究室に顔を出せ。教授はかんかんだぞ」

「げ、やはり…：そうか？」

「そりゃもちろんだ。もう一週間も研究室に行つてないだろ？」

「いろいろ忙しかったんだ」

「ぼそぼそとつぶやく俺。早苗はあきれたように肩をすくめた。

「実験はうまくいってるのか？ まだ一年が始まったばかりだから

と言って、油断するとすぐだぞ。教授にもにらまれるし、それに…」
早苗はちよつと顔をそむけた。

「あたしもさびしい」

「…」

早苗は俺の元彼女…と喋っていいのかどうか。三回生の頃まではいつも一緒につるんでいた。何度か俺の家に泊まりに来たこともある。その夜にはそういう関係もあった。しかし、告白したこともされたこともない。だが、周りからは公認のカップルと言われていた。そんな関係。

四回生になり、同じ研究室に所属したはいいが、まじめに実験にいそむ彼女と、ろくに顔を出さない俺。お互い変わりはないのに、状況が変わってしまったのか。

研究室で教授にこつてり絞られ、その後でおざなりに実験装置を動かした。当然ながら実験は進むはずもないまま夕方になる。研究室の学生部屋に戻ると、早苗が机に向かっていた。他のメンバーは誰もいない。何をしているのかと思ったら、論文を読んでいる。相変わらず勤勉なやつ。

「夕食でもどうだ？」

顔を上げた早苗が問いかけてきた。俺は笑って答えた。

「いいな、腹がぺこぺこだよ」

「そりゃあ、あんなに絞られたらな」

早苗は立ち上がり、白衣を脱いでいすの背にかけた。カットソーにジーンズの姿は、理系の女性らしく、そつけない。化粧もあまりしていないが、その言葉遣いにもかかわらず、早苗は女っぽさをそれなりに振りまいている。おしゃれに縁がないわけではなく、二人で改めて飲みに行ったりするときには、見事に変身することを俺は知っていた。

二人で学食に向かう。この学食は格安で食べられる上に、意外と味もいいので学生に人気だ。しかし、夕食の時間帯には少し遅め。

すでに空いている学食で、同じ定食を二人して取り、隅の席に座るとりよめのない会話で時間が過ぎ去る。こんな時には昔に戻ったように感じる。

「久しぶりに翔一郎の家に行ってみたいな」

不意に早苗が言った。たぶん俺と同じ気持ちだったのかもしれない。時を巻き戻そうという…誘い。

『やめるんだ』

“声”がささやいた。はっと虚空を見る俺。

『過去は過去だ』

“声”というのは何なんだ？ 俺の心の声なのか、別の人格なのか、霊なのか？ いつもの通り判断ができない。

「どうなんだ？」

珍しく不安そうに早苗が再度問いかけてきた。俺は首を縦に振りかけた。不意に脳裏に別の声が響く。“声”ではない。きらきら光る瞳が脳裏に浮かぶ。おいおい、あいつがどうしたってんだ！？

「悪いな」

「そう…か。翔一郎も忙しいからな」

早苗は立ち上がる。

「そういえば、実験がまだ残っていたんだ。あたしは研究室に戻るよ」

「俺はもう帰るさ」

学食で別れ、俺は駐車場に向かう。望まなくとも“声”は不意にやってくる。こんな時、俺は自分の意志で選択したのか、“声”に操られたのかわからなくなるのだ。

俺のバイトと仲間たち

「おまえ、そろそろ帰らなくていいのか？」

「もっつ」

上目遣いに見上げてくる少女、みよつじょういんあやか明星院彩華。

「泊まつていつてもいい？」

「ダメだ」

「え〜」

この問答も何回したのかわからない。苦笑しつつ拒否。時に人の話を全然聞いていない彩華も、この話は素直に聞いてくれる。口先はともかく、きちんと一線を引いているということだろう。いいことだ。

「はいはい、帰った帰った」

「む〜、なんか追い払われてる感じっ」

「追い払ってるんだよ」

「シヨウ、冷たいっ」

などといいつつ、彩華は窓を通過して、自分の部屋に戻っていった。ほっとしつつ、何か寂しさを感じている自分に驚く。苦笑しつつ気持ちいを切り替えた。出かけなくてはならない場所があるのだ。

車に乗り込み、夜の街路に滑り出す。空いている夜の道ですら、1時間ではきかない距離。街灯もない山道を、ヘッドライトのみが切り裂いていく。到着したのは古めかしく、荒れ果てた門。ゴシツク風に飾り立てた鉄格子の門はさび付いている。俺はヘッドライトを数回フラッシングさせる。と、音を立てないまま門が開いていく。さらにしばらく道を走り、目的地に到着する。これまた荒れ果てた洋館。映画にでも出てきそうな風情を醸し出している。車を扉のそばにつける。古めかしいスタイルをした執事が歩み出てくる……ことはなかった。いつものことだが。

扉を開け、中に入る。中は特に明かりがあるでもなく、かといって暗すぎるわけでもない。

「お、来たか。上がってくれ」

階段の上から声が響く。見上げると、ダークスーツに身を包んだ男。この館の持ち主。かどうかはわからないが、常にここにいることは確かだ。名前は二宮昭光。俺は会釈して階段を上る。いつもの部屋に入ると、いつものごとく、いつものメンバーがいた。

「よう」

「いらつしゃい」

「来ましたね」

「やほ」

二宮以外に四人。俺を入れて、全部で六人。このあたりのユニット全員だ。ユニットとは何か？ いずれわかる。

「何か飲むか？」

「ビールで」

二宮は奥に行き、程なくカットグラスに注いだビールを持ってきた。洗練されていると言うべきか、こだわりすぎというべきか。判断がつかない。

「さて」

二宮は自分のグラスを持ち上げ、言った。

「今週も全員欠けることなく集まれて結構なことだ」

「へいへい、前書きはいいから早く本題に入ろうぜ」

答えたのはタンクトップにワークパンツの男。お察しの通り肉体派。上半身にみっちり筋肉が見える。こらえ性もないやつだ。名前は長谷川志郎。

「そんなこと言ってるから、本題にはいるのがもつと遅れるのよ？
いい加減に学んだら？」

と、皮肉げにたしなめたのは女。この館にふさわしく、というべきか。黒いドレスに赤いルージュが印象的な二十代後半で、名前は久遠恵利子だ。

「まあまあ」

二宮は苦笑して続けた。

「今週の仕事は比較的少ないな。残念ながら。全員に回る数はない。しかも……」

俺をちらりと見る。

「捜し物が二件」

「ふむ、すると翔一郎さんの受け持ちになりますね」

俺の代わりに答えたのは、四十万朔都つひまほくと。一番読みにくい名前を持つこの男は、何の変哲もないシャツにジーンズ。身分としては、俺と同じ大学生。大学は違うし、理系と文系でも違う。能力的にも大きく違う。

「また探知系の仕事ばかりなの？　うちのユニットは探知系が弱いのに、なんでだろうねえ！？」

気楽に発言したのは横川はるか。まだ高校生だ。彩華と同じ年だと聞いた。恵利子と同じ色の服で、ドレスであることも同じ。しかし、恵利子のドレスが夜会服っぽいシックなものだとすれば、こちらは何かを勘違いしたような形。いわゆる、ゴスロリというやつか行くところに行けば、いっぱい集まっていると言いが、俺にはここ以外では縁がない。まあ、ある意味ではこの館に似合っているともいえなくもない。

「役立たずで悪かったな」

言い返す。確かに俺の探知は弱い。“声”だけなのだ。

「残りは三件。討伐が二件、破壊が一件。探知は夢の声ドリームウイスペアにしてもらうとして、残りをどう配分するか」

俺のコードネームを呼びつつ、二宮が司会する。

「余裕があるから、二人一組くらいか。討伐の片方は霊関連ゆえ、ブラックハーナイトスレイヤー
黒点と夜の刃の二人で。もう一つは魔獣だから、操作手マジックハンドと神の声ザ・ボイスで。内容は皆の前に置いた書類で確認しろ。もう一つの破壊、だが」

二宮は皆を見渡していった。

「俺が行くが、もう一人ほしいところだ。誰か希望はあるか？」

「私が行きましょう」

四十万が答えた。

「よかるう、では夜の刃と俺でやる。探知の二つは先ほど言ったとおり、夢の声だ」
ナイトスレイヤー
ドリームワイズパー

「役立たずが一番稼ぎ頭」

はるかが歌うように言う。いつもむかつくやつだが、的確だ。俺の力は弱い。近隣に力のほどで知られるこのユニットにあつて、俺だけが平均以下。組織全体で見ても、かなり弱い方なのだ。この近辺にもう一人探知系が現れたら、このユニットには参加できなくなるのではないだろうか。

「稼ぎに関してはいつも通り。各任務の報酬額の30%をそれぞれの達成者が取る。残りの70%は経費を差し引いた後に、全員で山分けだ」

二宮が淡々と続けた。要するにどういふことかというのと、今回は五件の任務があるわけだが、最初の任務の報酬額の30%を黒点でブラックハートある恵利子と夜の刃である四十万がおそらくは15%ずつ取る。次の任務は操作手長谷川と神の声はるか二人で30%取る。…という感じである。俺は二件請け負うから、二件のそれぞれ30%は取り分だ。それらの報酬の残りはどうするか。この屋敷の維持費用などの必要経費を抜くと、残りの額を全員で折半。このシステムだと、俺のような役立たずでも結構な報酬が見込める。他のユニットでここまで平等に報酬を分けているところはないらしい。なんだかんだといつても、二宮のリーダーシップが大きいのだろう。

俺は任務の重要点を頭に納め、書類を二宮に返した。ほかのメンバーも同じように書類を返す。彼はグラスを片手に持ったまま、古めかしい暖炉に歩み寄った。書類を放り込む。燃え上がる光が、彼の顔に踊る陰影を形作った。彼は暖炉に向け、片手をかざした。次の瞬間、こもった音とともに書類の灰がはじけ飛び、分解した。彼はこのユニットのリーダー。コードネームは破壊者である。インバクターロード

俺のバイトと仲間たち（後書き）

うーん…、ラブコメを書こうと思っていたのになんか違ってきていますわ

こういう話も好きなんですよね。

今回は最初のノリに（ある程度は）戻る予定です。

海へ向かおう（前書き）

だんだん伝奇もの（？）となりつつありましたが、
今回はまた元のノリに一応戻ります。
とはいえ…。

海へ向かおう

さて、時は土曜日。大げさに言うようなものでもなく、単なる週末である。大学は休み。研究室は開いているような気もするが、気にしない。いつものことだ。

軽く朝飯を食い、身なりを整えてから家を出た。

「おはよ〜、シヨウ」

「!?!」

振り向けば彩華が立っている。いつものことだ。いつもならどうやって追い払うか考えるところだが、今日は違う。

「彩華」

「なあに？」

「…」

「言っておくけど、私だって暇じゃないのよ？」

「…」

「今日だって友達にカラオケに誘われていたし」

「…」

「？」

彩華は下から俺の顔を見上げた。まあ、いつもの俺の反応と違うからな。

「ちよっと出かけてみないか？」

「!?!」

彩華の顔がぱつと輝いた。このあたり、非常に素直でいい。

「ど、どうしたの？いつものシヨウと違うじゃないの!?!」

前言撤回。素直じゃないな。

「別に…まあ、単なる気まぐれ」

「まあ、いつか。出かけるって、どこへ？」

うれしそうだ。やはり素直かもしれない。

「…海なんかどうだ？」

「おゝ、海！ いいこ！」

「両親に言わなくていいのか？」

「今日は遊びに行くって言うてあるから大丈夫！」

両親が思っている行き先とずいぶん違う気もするが、まあいいだろう。とにかく、俺としては海に行くことが重要なものだから。

彩華は張り切って家に駆け込んだ。俺も前もって買ってあった水着等を持ち、外に出る。案の定、彩華はいない。まあ、前回のこともある、20分くらいは待つ覚悟だ。

…甘かった。1時間たつても出てこない彩華。手を握りしめ、彩華の家を見上げる。さすがにチャイムを鳴らす気にはとてもならない。親が出てくることになったら、なんと説明したらいいのか。

1時間半後、彩華が飛び出してきた。

「ごめん」

文句を言っつてやろうと思っていたのだが、言葉を失った。パステルグリーンの短いチュニックワンピースとショートパンツ。伸びやかな足の先にはきらきらしたサンダル。すごく健康的で、かわいい。

「どっつ？」

くるりと回ってみせる。俺はほんと咳をした。

「露出が多い」

「む」

彩華はちよつとふくれっ面になるが、すぐににやつと笑った。

「これから海に行くのに、この程度で？」

「い、いや」

俺は上を向いた。

「それはそれ、これはこれだ」

彩華はけらけら笑った。

「それで、何で行くの？」

「俺の車だ」

「おゝ、シヨウウの車って初めて！」

「そうだったな」

「シヨウから誘われること自体、初めて！」

「まあそうかな」

「わーい！」

これだけ喜ばれると悪い気はしない。

「ま、とにかく行くか」

海へ向かおう（後書き）

ネット小説ランキングに登録しました。

つたない文章ですが、気に入ってもらえたら
投票よろしくお願いします。

小麦色？（前書き）

今回も続けてラブコメ（？）っぽいお話ですが、
何となく怪しい部分も。

だんだんシリアスシーンに移っていく予定です。

小麦色？

「わあ！」

彩華が身を乗り出した。海が見えてきたのだ。季節はまだ初夏のはずだが、一応まだ午前中の国道は、もやがかるほど暑い。むろん、車の中は冷房がきっちり効いているのだが。

「海か…」

きらきらと輝く海を目の前にして、俺も少し気分が浮き立つのを感じていた。俺の目的は別に海で泳ぐことではない。ないのだが、美少女と二人で海に行くというシチュエーションで、心躍らない男がいたら会ってみたいものだ。

海にほど近い駐車場に車を入れる。空いているかどうか心配したが、シーズンとしては少し早めなのと、昼食寸前の時間なのが幸いしたのか、別の車と入れ替わりで駐車をすることができた。

「じゃあ、着替えてくるからね」。シヨウは場所取りよろしく、ね？」

『帰るのだ』

不意に聞こえてきた“声”に俺ははつとなった。警告だ。こんな明白な警告はめつたにない。今までの経験からすると、帰るべきだろう。しかし、俺は実際のところ仕事できている。しかも、彩華まで誘ってだ。帰るわけにはいかない。彩華を巻き込んだトラブルになると困るが、しょせんは物探し。そこまではならないはずだ。

「シヨウ？」

彩華がいつの間にかこちらへ来て、下から見上げていた。白い胸元が見え、俺は目をそらす。

「あ、ああ。着替えてこいよ。俺も着替えてから場所取りすればいいんだな？」

「うん、よろしくね！」

彩華と並んで更衣室に向かう。何となく胸騒ぎは消えない。かつ

て、こんな警告を“声”が出したことがあっただろうか？

近くの海の家でビーチパラソルや寝椅子、シート等一式を全部借りて、俺は寝そべったまま彩華を待っていた。仕事は捜し物。俺の能力からすると、探し回るより“声”を待った方がいいように思える。“声”のコントロールはできないのだが、必要な目的に強く意識を向けると、その目的に応じた“声”が聞こえることが多いのだ。

「はい」

寝転がっていた俺の上に、彩華が顔を覗かせた。

「よ」

俺は起きあがり、彩華の方を向く。と、言葉を失った。

「どつどつ？」

「お、おまえ」

彩華は白いビキニを着て、腰の周りに同色のパレオを巻いていた。確かに先ほどの比ではない露出。白い肌がさらにまぶしい。彩華が動くのにあわせ、パレオの横がスリットのように開き、すらりとした足が太股の方まであらわになる。

「今、つば飲んだでしょ」

「そんなわけあるかつ」

俺は強く否定した。彩華はにやにや笑っている。小悪魔め。

「さてと、ところでシヨウは小麦色と白い色とどっちが好き？」

「な、なんのことだ？」

「海に来たら定番でしょ。ひ・や・け・ど・め」

彩華は両手でなにやら違う色の瓶を持ち、振って見せた。

「こっちはサンオイルだから健康的に焼けるし、こっちなら白い肌のまま。どっちでもお好みで」

「どっちでもかまわん」

「え、わざわざどっちも持ってきたのにつ」

「好きな方にしろ」

俺は無理矢理冷静さを取り戻そうとした。どうも振り回されてい

る。

「でも、シヨウが塗るのよ?」

「はい!?!」

彩華はシートの上につつぶせに転がった。

「背中届かないじゃない」

手でぽんぽんと背中を叩く。…なんか手が届いてないか?

「わかったわかった」

俺は適当に瓶の片方を持ち上げた。サンオイルの方だった。軽く

手のひらに液を落とし、彩華の背中に塗り始めた。

「ひゃっ」

変な声を上げる彩華。

「どうした?」

「い、いや、なんでもないよ」

塗り広げる俺。まあ、こういった経験もなかったわけではないのだ。彩華がごそごそする。

「なんだ、やめてほしいのか?」

手を止める俺。彩華は向こうを向いた。

「そ、そんなことないよっ。ちゃんと塗ってね」

声が動揺している。もじもじした仕草。俺は内心にやりとした。

ビキニの背中のひもをもちあげる。

「きゃあっ!!」

彩華が小さく悲鳴を上げた。

「こ、こんなところで? まだ私、心の準備が…」

「何言ってるんだ?」

俺には逆に冷静さが戻ってきた。ひもの下にオイルを塗り広げる。

「ちゃんと塗ってやろうと思ったただけだよ」

「あっ、そ、そうか。そうよね、こんな場所だしね。当たり前だよ
ね」

声が少しうわずっている。俺は内心にやにやしたまま、表面は冷静な表情を保った。主導権逆転だ。ほどなく背中にきちんと塗り終

わり、彩華のそばに瓶を置く。

「ほら、終わったぞ。ほかは自分で塗れるだろ？」
ちよつとにやりとする。

「それとも、前も塗ってやろうか？」

「シヨウのエツチっ。自分で塗れるよ！」

「そうかそうか」

彩華はこちらを向かないが、きつと顔は真つ赤だろう。

「じゃあ、塗っている間にだな。俺はなんか食う物でも買って来る。腹減ったか？」

「え！？ あ…う、うん、おなかぺこぺこ。私焼きそばがいいな」

「ああ、それと他にもいくつか、適当に買って来る」

「よ、よろしくね」

声はまだ動揺しまくっている。かわいいもんだ。こっちの方がいつもの俺たちって感じだな。

海の家に来た。列に並びつつ、さっきまで浮ついていた心を冷やす。

「俺は仕事できているんだからな」

呟く。だいたい、なぜ彩華を連れてきたのか。

「それは、海に一人で来るなんて不自然だろ？」

誰にもなく問いかける。実際は不自然じゃない。それはわかっている。なんとなく、気まぐれでつれてきた。それだけだ。

「別に危険な仕事でもなんでもないしな」

ちよつと前の人がたこ焼きとかき氷を買ったところだった。顔を上げて親父に注文する。

「焼きそば二つと、とうもろこし、後はアイステイーとコーラ」

そして、その瞬間、またも“声”が聞こえてきた。

油断

『あそこを見よ』

声が響いた。俺は親父の差し出す焼きそばを受け取りもせず、声の示す方を見た。だいたい探知系の能力者は、得られるイメージが曖昧なことが多い。どちらとも判断しがたいようなイメージを得て後から考えるとやっと意味がつかめる、というようなことが普通だ。だが、俺の能力は違う。多くは非常にはつきりとしたメッセージだ。その代わり、いつ来るかはまったくわからない。そのことに集中していれば、“声”が聞こえやすいことはわかっているのだが、それでも運次第である。

声を示す方向は、海水浴場から少しはずれた場所。そこが岩場になつており、海の方につきだしている。岩場の中心部には松が一本ある意味よくある風景だ。

「あそこに、あるのか？」

俺は昨晚読んだ書類を思い出す。目標の物は首飾りの入った木箱。その首飾りは守護の力が宿っているが、詳細は不明。一週間前に海に捨てられ、海流の関係でこのあたりに流れ着く確率が高いらしい。そもそも捨てられた物を、なぜ回収しようとするのか。それは俺の知ったことではない。俺は回収し、二宮に渡す。二宮は組織に報告し、報酬が来る。俺にとつてはその報酬だけが大事だ。謎が多い任務ほど報酬は多い。当然危険度も未知数だが、基本的に今までそこまで危険な任務が来たことはない。おそらく、俺の能力の限界を考えて、簡単な任務しか来ないのだろう。

「俺は役立たずだからな」

ふっと笑つ。

「さて、どうやって彩華から逃れてあそこを見るか…だな」

焼きそばなどをつかみ、彩華のところに歩き出した。まあ、なんとかなるだろう。

「私疲れちゃった」

「まあ、結構泳いだからな」

「ちよつと戻ってるね」

「おう」

二時間ほど遊んだ俺たち。彩華はかなり疲れてしまったようだ。

俺も疲れてはいるが、元々泳ぎは得意だ。まだ余力はたっぷりある。

「ちよつともう一泳ぎしてから戻る」

「え」

彩華はちよつと文句を言うが、つれていくわけにもいかない。

「戻ってきたらかき氷でも買ってやるから。待ってる間に体焼いていたら、暑くなるからちよつといいだろ？」

「よし、許してあげよう！」

現金なものだ。そこらへんが、ちよつとかわいいところでもある。彩華が帰るのを見届けて、俺は岩場の方に泳ぎだした。ついてからどうするかは考えていない。今までの経験からすると、特殊能力を持った物品等の搜索の時には“声”がよく現れるのだ。能力同士で引き合うのかもしれない。

それほど遠くないだけに、あっさりと岩場に到着する。岩をぬらしながら上るうとして海に落下。ちよつと岸のところが垂直っぽかったのだ。もう一回チャレンジしてはい上がる。

「くそ、砂浜から回ればよかったな」

俺は少し座って休憩した。そもそもこの岩場も小さめとはいえ、自力で木箱を探し回るのは少ししんどい。ここが本当に目的物の近くなら、ほどなく“声”が聞こえるはずだ。今まではそうだった。俺は油断していたのだ。油断といっては正解ではないかもしれない。俺は仕事をするときには、いつも“声”を頼りに動き、あまり疑問も持たないまま達成していた。俺の声はいつ現れるかわからない代わりに、言うことは的確であり、従っていれば自動的に問題もなく終わるのだ。

「こない」

10分か15分ほど待っただろうか。“声”が微塵も現れないことに俺はいらだっていた。それなりに木箱のことに思考を集中させていたつもりだし、今までならこれだけ待てばまず間違いなく“声”を聞けていた。

仕方なく俺は立ち上がり、周りを見渡した。探すには少々広いといっても、探せないことはない。ただ、本気で見つかるまで探し続けたら、彩華が腹を立てることは確実だ。それに、そもそも“声”がないとすれば、ここにはない確率が高いともいえる。

「はずれ…かもな」

言いつつ地面に目を落とし、歩き出した。正直10分程度探してから、ないことを確認して帰るつもりだった。しかし…。

「む」

足下に堅い感触。引っかかって倒れるほどの速度で歩いていなかったからよかったのだが。見下ると、古めかしい木箱。

「ビンゴー！」

拾い上げる。後は中に首飾りがあるかどうかだ。

不意に頭の中に何か響いた。“声”が来る予兆。しかし、肝心の“声”は現れず、予兆のみ。一瞬止めた手を動かし、俺は木箱の横の小さなレバーを下げた。

感じたのは殺意。純粹の、混じりけのない、ストレートな殺意。

一瞬前までは毫も存在していなかったもの。俺は反射的に後ろへ下がった。足下がでこぼこしたここで、よく転ばなかったものだ。転んでいたら、俺は即死だったろう。

空中に、何かいた。はっきりとは見えないもやもやとしたもの、目には見えにくい、その吹き付ける殺意はほとんど形を成しそつである。

「ちくしょつ」

俺は驚いているわけでも、混乱しているわけでもなかった。この手のものは、仕事柄時折見ている。今までと違うのは、いつも仲間が共にいたということである。今は孤立無援。殲滅能力も何もない俺一人。心を落ち着け、敵を見定める。悪霊のたぐいだ。木箱を開けたことが原因なのは、当然の帰結。ちらりと、手元の空いた箱に目を落とす。首飾りは衝撃でか、他の要因によるものか、砕けていた。納得する。

「守護の力とは、悪霊の封印といったところかな」

ゆらゆらと浮いているものが、第二撃を放った。悪意が事実上形となり、空気によるものではないカマイタチとなり、俺の方に収束する。俺はなすすべもなく後ろにとびすさった。

この場で何かできることは？ ない。…いや、ある。それは逃げる。俺には戦闘能力はない。助けてくれそうなものは唯一首飾りのみ、それも砕けている。後は水着のみしか身にまとわないこの身体。

ゆらゆらとうごめく姿からカマイタチが投射される。風とは無関係なその悪意は、一直線に俺をねらうが、俺はバックステップやサイドステップによりそれを避ける。それほど強力な敵ではないらしい。カマイタチも慣れてしまえば比較的避けやすいし、複数敵がいるわけでもない。とりあえず、このまま逃げることができるかもしれない。

背中激痛が走った。悲鳴を噛み殺し、後ろに注意を払う。当然前にも注意をそらしてはならない。

「ちくしょう、もう一匹いたのか…」

先ほどから二度目の悪態。後ろにも同じもやがあった。そして、同じようだが異なる悪意。悪意は悪意であるが、別人格が放つ別の悪意。つまりは、悪霊が二体。いや、二度あることは三度ある。二体とは限るまい。これは、いよいよピンチだ。

「な、何？ 何なの？」

その場に、おびえた声が響き渡った。

油断（後書き）

すっかり短編じゃなくなっていますね。
短編を期待されている方、申し訳ありません。

声

「く、彩華^{あやか}！」

俺は瞬間、状況を忘れて振り返った。そこには、パラソルの下でのんびりしているはずの、彩華の姿があった。タオルを肩にかけているので、おそらくここまで歩いてきたのだろう。俺は岩場が地続きの場所にあることを呪った。彼女は棒立ちになり、もやを見つめていた。

そして、彼女の向こうにもう一つのもや。三体目。

「いくつ…いやがるのか」

ぎりつと歯を噛みしめた。そもそも彩華をつれてくる必要などなかった。俺が仕事を甘く見ていたせいで、気まぐれに彩華を連れてきた。そして、ピンチに巻き込んだ。少なくとも、彩華だけでも無事に帰すのは俺の義務だ。

悪意で形作られたカマイタチが俺を襲う。それを無視して彼女のところに走る。左肩と脇腹にカマイタチが命中した。肌が切れるわけではなく、赤く腫れ上がる。激痛が走るが、そのまま走る。三体目の悪霊がカマイタチを投射した瞬間、俺は彩華を抱きかかえて横に飛んだ。

カマイタチが地面に突き刺さる。しかし、地面ははじけるでもなくカマイタチを吸収した。物質ではないのだ。肌は切れずとも、精神に反応して打撃を与える。この攻撃はそういったたくいのものであった。

「ちょ、ちょっと」

彩華が我に返った。

「こ、こら。暴れるな」

「そんなところさわらないで！」

俺は元々それほど力が強いわけではない。彩華を抱えて動いているのだから、火事場の馬鹿力というやつなのだ。先ほどからカマイ

夕チの大半を避け続けているが、それもそろそろ限界だった。“声”も現れない。ピンチに陥ったからといって、隠された力が発揮されるわけでもない。現実はそのようなものだ。

ついにカマイタチがまともに俺をとらえた。衝撃はないのにもかかわらず、身体はその衝撃を感知し、俺はよろめいた。彩華を抱えたまま、そばに倒れ込む。必死で彩華をかばった。彩華もさすがに静かになっていた。

三体の悪霊が一瞬で集まってきた。歩調を合わせるかのように、カマイタチを放つ。俺は必死で転がろうとした。最後まであきらめてはならない。

『止まれ！』

声が響き渡った。耳だけではなく、身体全体にしみいるような声。“声”と似たところがあるが、力のほどが段違いである。俺はこの声に聞き覚えがあった。振り向く。

「はい、はるかちゃんです」

胸元で軽くこちらに両手を振っているのは横川はるか。神ザ・ボイスの声と

呼ばれる少女であった。

俺は頭上を見る。案の定、悪霊たちはゆらめくことすらなく静止していた。空をバツクにそれを見ていると、時間が止まったように見える。これがはるかの力だ。絶対的な命令権。

『滅せよ！』

再度声が響く。悪霊たちは空気に溶け込むように消え失せた。今まで俺が苦戦して、というより為す術もなく逃げ回っていたのが嘘のようだ。

「相変わらず役立たずだね」

はるかが声をかけてきた。俺はむっとする。

「ありがとよ」

不機嫌な礼の言葉に、はるかは笑い声をあげた。こちらに軽い足取りで駆けてくる。倒れている俺のそばに立ってまた笑った。

「いつまで彼女組み伏せてるのよ？　こんなところで、いやらしいねー」

俺はあわてて彩華から離れて立ち上がる。静かだと思ったら、彩華は気絶している。俺は彩華の肌を目を走らせた。みみず腫れのよなものはない。カマイタチにやられたわけではないようだ。

「やっぱり、素人さんにはシヨツクよね。こーいうの」

はるかが座り込んで、彩華の肌をちよんちよんとつついている。へそのあたりから始まり、だんだん動かしていく。胸のあたりに近づいたところで俺はさすがに止めた。

「やめろ」

はるかは胸に進撃することだけは止めたが、同じ場所をつんつんとつついた。

「まーったく。ピンチを救ってあげたのは誰だと思ってるんだか」

「だから礼を言っただろうが」

「さっきのが礼？　そりゃあ、確かに『ありがと』とか聞こえたよ。うな気もするけどね？　普通はもっと感謝の気持ちを込めて言うもんでしょ！？」

「あゝ、そーかそーか、ありがとよ」

「全然こもつてないっ」

二人でぎゃあぎゃあと言い合う。こうできるのも、窮地から脱したおかげであり、実のところはるかには十分に感謝している。ただ、素直に表せないだけだ。

「さて、戻ろっか」

「そついえば…、何でおまえはここにいるんだ？」

ん？　と顔を上げたはるか。

「夏の海に来ると言えば理由なんて一つしかないでしょ」

「仕事か？」

「ちがっう！　泳ぎに来てるの。バカンスっ」

「バカンスと言うほどのもんか？」

「いいのっ」

「じゃあ、何で俺のピンチにちょうど現れたんだ？」

「そりゃあ、泳いでいたら見えたから…だよ？」

「ふうむ」

俺はまじまじとはるかを見た。ふっとはるかは目をそらす。彼女の水着はからっからに乾燥していた。

「おまえ…」

「何？」

「意外とスタイル良かったんだな」

「は!？」

はるかは自分の身体を見下ろした。出る場所は出て、ひっこむところはひっこんでいる。かなり小柄だが、日本人離れして胸の發育もいい。その辺の女性方にねたまれそうなボディ。黒と紫のフリルがたくさん付いたワンピース型の水着を着ている。いつものゴスロリ系のドレスをそのまま水着にしているようなデザインだ。

「まったくもう、翔一郎ったらドスケベ。そこ動いちゃダメなんだからねっ」

はるかは形のいい足を上げると、俺の腹をけっ飛ばした。俺は当然避けようと…したが、なぜか身体が動かない。はるかの足が軽く俺の腹を押し、俺は動けないまま海に落っこちた。

「おい、今声で俺の動きを止めたらうが！」

はるかは岩場にかがみ込んで、立ち泳ぎをしている俺を見下ろした。

「へへーん、単に翔一郎が鈍いだけだよーん！」

声（後書き）

ん、一応ラブコメっぽい…のかなあ（自信なし）。
とりあえず、更新だけはしっかりしていきたいものです。

一難去って…

俺は彩華を抱えて、元の場所へ戻っていた。ビーチパラソルの下の寝椅子に彩華を横たえ、俺は後ろを向いた。

「で…?」

「で…、つて?」

聞き返したのは女の子、誰かというともちろん横川はるかである。彼女はパラソルの影の外に座り、日差しを浴びまくっている。

「何でついてきてるんだ?」

「なんか問題?」

「友達のところへ帰らないのかよ」

「ん〜? 一人で来てたしね」

「一人でえ!? 友達いないのか?」

「失礼なっ! 何人もいるよっ」

「じゃあ、何で一人なんだ?」

「たまたまよ。あたしだって一人になりたいときがあるし」

「それなら、何で俺たちについてくるんだ?」

「もう一人でいたい時間が過ぎたから」

「なんだそりゃ!」

どうもおかしい、はるかは外向的なタイプであり、海水浴にたったの一人で来ているなど信じられない。女だけが男女かわからないが、グループでワイワイとしているのが普通のはずだ。そもそもグループで来ていたならば、俺たちのことに首をつっこんでいる余裕はないはずだから、それは良かったといえるのだが。

俺はじつとはるかを見つめた。はるかはふつと顔をそらして、海の方を眺める。さつきと同じだ。

「でも、いい天気で良かったね」

「まあな」

俺の中には確信めいたものが生まれつつあった。それを問いただ

すべきかどうか考えつつ、俺は彩華の隣、はるかと逆の側に座った。と、はるかは立ち上がり、俺の隣に来た。

「何だ？」

「別に？」

まあいい。俺は彩華を見た。攻撃が当たったわけでもないから、程なく起きるはずだが…。しかし、俺のせいで巻き込んでしまったのだ。しかも、あんなものを見たのは生まれて初めてだろう。普通人はあんなものを見る必要はないのだ。

「ん…」

彩華が身じろぎした。

「大丈夫か？」

俺は努めて冷静に言った。俺が動揺しても全く意味はない。彼女の精神的シヨックを考えると、どうケアしたものか途方には暮れるが。

「あれ、私…」

「体に痛むところはないか？」

彩華は半身を起こし、俺を見た。ちよつと肩を揺すったりしている。

「え、いや。何もないけど？」

「そっか…。良かった」

彩華はきよんとした。どうも何か変だ。

「やだなあ、シヨウウったら心配しすぎっ」

不意に側のはるかが言った。何を言い出すのか！？

「ちよつと暑さで倒れただけでしょ？」

「は…！？」

「まあ、暑さで倒れること自体、ちよつと体力ないぞ」
はるかはにやにやと笑っている。

「ごめんね。看病させちゃって」

彩華は謝りつつも、嬉しそうだ。

「ちょっと待て。暑さじゃないだろ？」

「だったら泳ぎ過ぎかなあ。普段ちよつと運動不足かな…？」

彩華は見当違いのことで、悩んでいる。

「おまえ、さっきのこと忘れたのか？」

「さっきって、知らないけど？ ちょっと立ちくらみかと思うたら、その後はわかんないから、倒れたっていうことだよな？」

「ま、まあ…な」

俺はとりあえず同意してみた。彩華も悪霊を確かに見ていたはずだ。忘れてしまうことがあるのだろうか。自己防衛のために、記憶を改ざんしてしまうということを知ったことがある。これはその一つなのだろうか？

「ところで…」

「何だ？」

「その、隣の女の子は誰？」

彩華は心なしか半眼で俺を見ている。俺はちらりとはるかを見た。はるかにはやにやとしたまま、俺と彩華を見ていた。

「横川はるかです。よろしくね」

気がつくとはるかは俺の隣にびったりとくっついてた。

『何やってんだ！』

俺ははるかにささやいた。

『いやあ、影はけっこう狭いから』

『そんな問題じゃないだろっ』

彩華のまなざしがますます冷たくなってきた。

「仲がいい女の子がいてよかったねっ」

「でしょでしょっ」

はるかが変わりに答えた。こ、こいつ…。

一難去って…（後書き）

光回線が死んで、修理を呼ぶことになってました。
もう復旧は済んだんですけどね。

ネットが止まるとけっこうつらいですねえ。

一難去って…2

帰りの車内は気まずい雰囲気か漂っていた。行き雰囲気とは大違いだ。理由は簡単。はるかが同乗してきたからである。

『夕方になってきたな』

『そうだね』

『はるかは帰らないのか？』

『どっちでもいいけどね。でも、ここって結構遠いよね。やっぱり、早く帰るべきかな』

『ここへはどうやって来たんだ？』

『電車で来たよ』

『そうか、帰りの電車の時間はわかってるのか？』

『もちろん』

『何時なんだ？』

『一時間後』

『…』

『…』

というような会話が繰り返し広げられたのだ。元々、夜まで海岸にいる予定はなかった俺は、不承不承はるかを乗せて帰ることになった。彩華の機嫌がいつそう悪くなったの言うまでもない。

ただ、俺も断れない理由があった。後で二宮にでも確認を取らないといけないが、はるかが来ていたのは偶然ではなく必然ではないか、そのあたりの疑惑、というよりも確信が俺の中にあつた。何事もなかったのならともかく、危急を救われたのだ。俺としては車に同乗するくらいのもので、目くじらを立てるわけにはいかなかった。正直、嬉しくはなかったが…。

助手席に座っている彩華をちらちらと見る。別に彩華の機嫌を取らないといけないわけでもないが、せつかく誘ったのだ。楽しい気分ですら帰ってもらうべきだ。それはわかっているのだが、問題はどうか

すればいいか……。だ。そもそも、はるかが乗ってきたのが確信犯なのは間違いない。ただ、こんな事をする理由が、今ひとつつかめなかった。

「なあ」

「何？」

彩華の声が尖っている。

「俺が悪かったよ。だから、機嫌なおしてくれ」

「別にシヨウは何もしてないでしょ。たまたま、友達と、会っただけだよな？」

「だから、そういうんじゃないって」

「じゃあ、どうなのよ？」

まるつきりご機嫌取りモードになっている。それはわかっているが、突き放すこともできない。俺も軟弱になったものだと、内心舌打ちしたい気分だった。

「はるかの家はどこなんだ？」

頭越しに後部座席に問いかけてみる。ちょっと眠そうな生返事があつた。

「翔一郎の家のそこそこ近く」

「送っていくから、場所を教えてください」

「別にいいよ。近いから歩いていくし」

「そんなわけにはいかんだろ。もうそこそこ遅い時間だし」

「大丈夫だよ。あたし遅い時間にうるうるしてるし」

はるかを早いところ車から降ろしてしまいたいのだが、この調子だと住所を言いそうもない。仕事仲間なのに、正直住んでいる場所も知らないのだ。そして、彩華の方は先ほどから会話がないう。寝ているわけではないが、窓の外をじっと見つめて身動きしない。相変わらずかなり不機嫌だ。

ほどなく車は俺の家の前に到着した。俺が何か言う前に、彩華は素早くシートベルトを外して、ドアを開けた。

「おい……」

「今日はどうもありがとう」

一応礼を言っているが、声は冷ややかだ。とりつく島もない。俺が答えないうちに、彩華は車のドアを閉め、家に駆け込んだ。はるかがそれを見て冷やかした。

「あーあ、ふられちゃったね」

「ふられるも何も、別につきあっていない」

はるかは車から出た。と思ったら、助手席の扉を開け、前に滑り込んでくる。

「家に帰るんじゃないのか？」

「まっさか……。これからユニットのところへ行くんでしょ？」

「そのうちにな」

「だったら、今からすぐ行ってもいいよね？ あたしも用事があるし」

俺は時計を見た。確かに今から行けば、時間的にはちょうどいいかもしれない。彩華のことが気になるが、さすがに今晚はもはや俺の家に押しかけてくる時間でもない。明日にでも何とかするしかないかもしれない。

「仕方がない……」

このまま行くしかないだろう。かなり彩華のことが気になるのだが、仕事は仕事だ。俺は家を覗くことすらせず、車を発進させた。

その真相

二宮の住んでいる屋敷にきた。いつ見ても巨大な館だ。人里離れているのだから、生活はしにくいと思うのだが。俺としては町中に住む方が好ましい。とはいえ、集合場所としてはこの館はなかなか便利で、広いだけにいろいろな施設も整っている。自分がまとめ役をするのは正直無理なので、二宮のような存在がいてくれるのが非常にありがたいともいえる。

車を正面にいつものごとく適当に停め、俺ははるかと共に屋敷に入った。相変わらず暗いが、二宮はいるようだ。階段を上がっていく。いつも集まる部屋に向かおうとすると、二宮が現れた。

「どうした、今日は集まる日ではないはずだが」
相変わらずクールに二宮が問いかける。

「まあな。一応仕事を済ませたんで、報告がてら来てみた。ちよつとほかに聞きたいこともあるしな」

二宮は背後にいるはるかを一瞥し、うなずいた。

「よかるう。こちらに来るがいい」

歩く音ががらんとした館に反響する。いつもの場所とは異なる部屋に二宮は歩いていった。広い部屋に長いテーブル。その上座に一人の女が座っていた。

「あら、いらっしやい」

黒いロングドレスに身を包んだその女は、こちらに向かって涼やかに微笑んだ。久遠恵利子くとうえりこだった。

「恵利子…か？ 今日集まる日じゃなかったはずだがな？」

俺は先ほどの二宮と同じ質問をした。彼女は手に持っていたロゼワインを一口飲み、またも微笑んだ。

「同じことはあなた方にも言えるんじゃないのかしら？ 集合日でもないのに、ユニットが四人。珍しいわ」

彼女の前にはソースのかかった魚料理がある。向かいの席にも同

じものが。二宮と食事でもしていたのだろうか。

「夕食としてはかなり遅い時間だな」

「そうかしら。私はいつもこのくらいだけれど、人によりけりかもしれないわね」

ふと、俺ははるかを見た。ここへ来てから全く口をきいていない珍しいことだ。

「あらあら、はるかちゃんは眠そうね」

恵利子の声が笑みを含んだ。確かに眠そうだ。頭が今にもがくりと倒れ込みそうな様子。

「まあ、とにかく座れ。食事はもう取ったのか？」

二宮が聞く。仕事の後はほとんど何も食べていなかったのを思い出した。そう告げると、二宮は頷いた。

「メインディッシュはさすがにないが、スープとパン、後簡単なものくらいなら出せる。それでかまわないか？」

かまわないどころか、大いにありがたい。俺とはるかも席に着いた。

ほどなく、二宮が料理を持って現れた。普段食べないような料理のにおいが食欲を刺激する。

「これはおまえが作ったのか？」

「そうだが」

二宮は自分で料理をするらしい。召し使いなどもないのだから、自分でするしかないわけだ。俺はスープを一口食べた。うまい。

「今日はスペイン風にまとめてある。オリーブオイルが苦手でないといいのだがな」

「特に問題はないさ。俺は何でも食べる」

などと言ってはみたが、トマト風味とオリーブオイルの味がマッチしていてなんともうまい。二宮は俺の側に来ると、完璧なスタイルでワインを注いだ。ダークスーツに身を包んだその姿は、こういうシーンにとても似合っている。恵利子も同様だ。俺とはるかは…

あえて言うまい。

「さて」

食事が一段落したところで、俺は切り出した。二宮が片眉を上げた。

「さつきも言ったが、仕事を済ませてきた」

「それはおめでとう」

恵利子が口を挟む。俺はちょっと不機嫌だった。

「別におめでたくはない」

「そうなの？」

「そうだ。守護の首飾りを発見する仕事だが、目的の物は壊れていたら」

「壊れていた…。そうか」

二宮が意味ありげに頷く。俺の言いたいことがわかったらしい。俺ははるかを見た。席に座ったまま、うつらうつら居眠りをしていく。

「前からなのか？」

「前から…。まあな。必ずというわけではなかったがな」

「つまりだ。はるかとは偶然だと言いつ張っていたが、偶然ではなかった…。ということだな？」

「そのとおりだ」

「俺が危険になったときに備えて、はるかを護衛役につけていた、そういうことか」

「必ずしも彼女ばかりではないがね」

二宮はワインを口元によせた。グラスの向こうにある目だけが俺を見つめた。

「手すきの者がいたら、おまえの仕事に同行するようにしていたのは事実だ。当然おまえに知られないように…。だが」

俺は口をかんだ。

「俺が信用できないからか？ このユニットでは一番若輩だからか？」

「勘違いするな。信用できるとかできないとかそういう理由ではない。単に、おまえに戦闘能力がないのが理由だ。危険が予測される任務に際しては、予防措置として他の人間をつけていた。それだけだ」

「それが信用できない、ということだろうが」

「そういう言い方もできるかもしれないけれど」

「今まで黙っていた恵利子が口を挟んだ。」

「気づいたと言うことは、はるかちゃんに助けてもらったってことじゃないの？」

「ああ」

俺は不機嫌に言葉を継いだ。

「首飾りが壊れたせいだと思うが、悪霊が三体出た。俺だけじゃどうにもならなかった」

「それなら、いてよかったということよね？」

「確かに俺だけだと、任務が達成できなかったかもしれない」

「俺たちはプロだ」

二宮が言った。

「プロは任務の達成を最優先に考える。予防措置を考えるのは当然のことだ。特段、おまえが信用できないとか、力が足りないと言っているわけではない。他の者にも必要とあらば同じことをしただろう」

「ああ、そう言っていると、よけい彼が怒るわよ？」

恵利子がからかうように言った。ワインを一口飲んで、言葉を続ける。

「元々はね。はるかちゃんの発案だったのよ」

「はるかか？」

「そう、あなたの初任務。半年前だったかしら。そのときに、はるかちゃんがあなたについて行きたいって言い出したじゃない」

「そうだったな」

「二宮が却下したと思うんだけど、その実、影で護衛というか、見

守ることにしたのよ。万が一の時のために、と喋っているのかしら

「なぜだ！」

「はるかちゃんが、ついていきたがったからよ」

「後は、先ほども言ったように、任務の成功率を上げるためだ」

二宮が言葉を引き取った。

「今日の事態になるまで、はるかの存在に気づかなかったと言っことは、おまえがまだ未熟だということだ」

「く……」

悔しいが、言い返せない。俺は黙り込んだ。

魔術師と超能力者

「次からは任務の時に他のメンバーが必要なら、正式に知らせてくれ」

俺の主張に、二宮は考え込んだ。

「ふむ…」

「そもそもだ。今までは、俺に知られずについてきていたメンバーは、無報酬だったということじゃないのか？」

「そうなるな」

「それはおかしいんじゃないか」

「厳密に言えばな。だが、そこまで気にする必要はない。ユニットというのは能力者の集まりではあるが、ユニット単位での成果も要求される。ユニットの成功率上昇のためには、細かいことは言っておれんこともあるのだ」

「だが！」

「それほど気にするのなら、これからのことを考える。これからは個人ではなく、ユニットのことも少しは考えて行動するがいい」

「…わかった」

椅子に沈み込む俺。二宮は立ち上がり、棚から書類を取り出した。「理解したのならけっこうだ。急な任務があるんだが、受けてみる気はないか？」

俺は顔を上げた。汚名返上というほどのものではないが、よほどひどい任務でなければ受けるつもりだった。

「俺一人でやれる任務なのか？」

「もちろん違う。今回は黒点と組んでもらう」
ブラックハート

俺は恵利子の方を見た。俺が見るのを待ち受けていたかのように、笑う恵利子。

「仕事の内容は魔術師の捕獲だ。詳しい内容は書類を読んで、頭にたたき込んでくれ」

俺は書類を受け取り、読み始めた。沈黙が場を覆う。書類はいつもの通り簡素で、程なく俺は読み終わった。

「はぐれ魔術師とは何だ？」

「組織に属していない能力者で、魔術を使用する者のことだ」

「仕事としては、こいつを見つけ出して捕まえればいいということか」

「生死は問わないが、生きて連れ帰った方が報酬額は高い。ただ、捕獲自体に関しては、黒点ブラックハートに任せるといい。おまえは目標の居場所探知を手伝うことになる」

「見つけてもらえたら、私がやるわよ」

恵利子が後を引き取った。

「『魔女』対『魔術師』という気が利いてていいかもしれないわね」

「魔術…か」

助手席で俺はつぶやいた。運転席には自らを『魔女』と呼んだ恵利子が、楽しそうにステアリングを操っている。

「魔術師と関係する任務は初めてなのかしら？」

「気がつかずに対戦していたということがなければな。俺には魔術というものがよくわからんからな」

「魔術というのは、普通にイメージ通りでいいと思うけれど。呪文を唱えて、力を使うタイプの能力者のことね」

「俺は違うわけだな」

「私たちは分類すると、超能力者…ということになるのかしらね。意志だけで力を制御するタイプ」

「私たち？」

俺は聞き返した。

「魔女とかいってなかったか？」

「ああ」

恵利子は楽しそうに笑った。カーブにつっこむ。俺の身体を急激

な横Gが襲った。バケットシートのサポートがなかったら、ドアに叩きつけられそうな遠心力。恵利子はそんなドライビングのまま平然と言葉を継いだ。

「私が魔女と呼ばれるのは、魔術を使うからじゃないわよ。私の力の万能性が魔術に近いというのが一つ」

話しつつ、峠のカーブを高速でクリアしていく。俺は出さないし、出せない速度域。

「もう一つは、私がやった行動のせいね。昔のことだけど…」
「行動？」

「それについては話したくないの。できれば、詮索しないでほしいわ」

恵利子の顔に陰りがさした。俺はまずいところに触れたらしい。

「そうか。それでは話を元に戻すが、魔術が呪文が必要で、超能力に必要がないのなら、超能力の方が有用じゃないのか？」

「そうね、そこだけ見れば、正解。でも、力の定義はそれだけじゃない」

恵利子は考えつつ説明を続けた。

「超能力というのは、主に素質があるかないかで力の強弱が決定されてしまうもの。素質を十分に引き出せていない人がいたとすれば、その人は力の向上の余地があるけれど、限界に達したらもうほとんど向上の余地がない」

「それはそうだな。俺も力がこれ以上上昇するとは思えない」

恵利子は不思議な表情をした。

「それはどうかしら」
「どういう意味だ？」

「さあ…ね。話がそれってしまったわね。魔術についてだけれど、超能力と魔術はちよつと違うわ。魔術というのは学問。呪文の組み立てや力の効果は理論によって決まっているし、その使い方次第でいくらでも強くなる余地はある」

「そんなにいいものなら、なぜ能力者は少ないんだ？ 超能力者が

少ないのは当然としても、その他の者たちは全員魔術師になればいい」

「うーん、そうね。それもある意味正解なんだけども、どういったらいいかしら」

少し沈黙が続く。

「たとえば、お金持ちには誰でもなれる可能性がある。ベンチャー企業を立ち上げるとか、医者を目指すとかいろいろ方法がある。でも、実際にお金持ちになろうと努力する人は少ないし、その中で本当のお金持ちになれる人はもっと少ない。魔術も同じようなものと考えたらいいと思う。誰でも学べる可能性はあるけど、学んでも大成する確率は低い。おまけに、お金と違って、一般の人に存在すら知られていないから、なおさらね」

「ふむ…、つまり今回の目標は魔術師になれたということは、強力であると考えてもいいのか」

「もしかしたらね。でも、魔術師にも弱い人もいるわよ。さっきのたとえで言うと、ぎりぎりお金持ちの端っこに引っかかってる人…みたいな感じね。でもまあ、トップクラスの魔術師は、トップクラスの超能力者よりも強いことが多いけれど」

「…すると、恵利子よりも強い魔術師もたくさんいるということか？」

「たくさんかどうかはともかく、何人もいるわよ？」

「今回の敵はどうなんだ？」

「資料読んだでしょ？ わからないわ。強かったらいいけどね」

俺は最後の意見には賛成できなかった。まったくできなかった。

血と魔術

一時間弱のドライブの後、俺と恵利子は町中に戻っていた。俺の家ともさほど遠くはないエリア。信号待ちで停車した車の中。

「資料によると、最後に目標が目撃されたのがこのあたり」

恵利子は俺に顔を向けた。

「しばらくはあなたのお仕事よ。よろしく頼むわ」

「了解」

いつものパターンに従い、俺は先ほどから目標の情報に集中していた。とはいえ、“声”は向こうからやってくるものである。今のところは何も聞こえてこない。このあたりがづらいところだ。

「とりあえず、目撃地点を中心にあたりを流してくれ」

「わかったわ」

ちょうど信号も青になる。恵利子はなめらかに車を発進させた。

深夜であり、信号のほとんどは点滅状態になっている。ほとんど止まることもなく、車は走っていく。俺は黙ったまま、意識を集中した。恵利子も何も質問することもなく、運転に集中していた。一筆書きのように、同じ道路は二度と走らない。そのくせ、目撃地点からあまり離れることもない。

『公園…』

不意に“声”が響く。いつも不思議に思うのだが、この話してくる相手は誰なのだろうか。毎回同じ人物かと言われると、そうではない気がする。口調が微妙に異なったりするからだ。共通点は、あまり長く話してくれることはほとんどない、ということくらいか。

「公園」

「公園：このあたりにあつたかしらね」

恵利子はちよつと首をかしげたが、すぐに思い当たったらしい。

今までの流すスタイルから、明白に目的地に向かうよう運転を切り替えた。ほどなく、車は路地に滑り込み、停車した。

「ここから少し行つたところに公園が一つあるわ。すごく小さい公園だけれど、それでいいのかしら」

「今のところはわからないな。“声”に期待するしかない」

「相変わらず、便利なのか不便なのか微妙ね」

「…」

相変わらずきつい女だ。まあ、言つたところで仕方がないのだが。

車を降りる。恵利子に続いて、薄暗い街灯の下を歩いていく。警告の“声”は特に響かない。だからといって、安全とは言い切れないのだが。

「それにしても、夜中の公園か。いったいなぜ公園なんだ」

「さあ、どうでしょうね。まさか夜のデートということもないでしょうしね」

「案外それだったりしてな」

そういう間に、公園が見えてきた。砂場やブランコがあるような普通の公園。昼間は子供たちがたくさん遊んでいるのだろう。だが、夜に見ると不気味なオブジェとその影としかいいようがない。

「特に何か警告とかはない？」

「今のところ何も聞こえてこないな」

「わかつたわ。ここで待っていて。公園には私一人で入るから」

「大丈夫か？」

俺の問いかけに笑顔が返る。

「私を誰だと思ってるのかしら？」

ドレスを翻し、公園に踏みいる恵利子。夜がいやになるほど似合っている。

「いやいや」

頭を振る。それどころではない。公園の中に目標がいるはずだ。それほど大きくはない公園。中には誰もいない。少なくともいらないように見える。

血と魔術（後書き）

体調不良で更新がすっかり遅くなってしまいました。
これからまた更新していきたいと思しますので、
よろしくお願いします。

血と魔術2

「あなた…」

恵利子の声が聞こえた。決して大声ではない。それどころか、何かをこらえるかのように、声を押さえ込んでいるようだ。それでも、深夜の静寂の中では俺の方まで聞こえてくる。

…ということは、あそこに。公園の向こう側で影になっている場所。だが、何かに遮られていることはなく、ここからでも見えないことはない。そこにうずくまっている人影。怪我をしているわけではないだろう。影に紛れてよくはわからないが。

「魔術師と聞いていたから期待していたんだけど、外道ね」

またも恵利子の声。いったい何を言っているのか。俺は公園の外道を歩き、そちらに近づいてみた。

「…何が問題なんだい!？」

初めて相手が答えた。何かのどに詰まっているかのような聞き苦しい声。うずくまっている影が立ち上がった。黒っぽい衣装を着ているのだろうか。相変わらずよく見えない。

「魔力の収集のためのやり方が外道だと言っているのよ」

「これかい？」

影は何かを蹴った。俺はさらに目をこらした。あれは…まさか…人？ 足下には誰かが倒れている。

「いったい何を言っているんだか。どこにでもいるクズの一人だよ。社会に寄生するしか脳のない奴ら。有効に使ってやるのが本人のためじゃないか」

影は笑った。恵利子が足を踏み出した。影は飛び下がる。

「おっと、あんたが誰か知らないが、俺に用があるということ…」

「そう、あなたを捕まえに来たのよ」

「おもしろい。魔力を充填したばかりだし、たまにはこういう風に魔力を無駄遣いしてみるのも楽しいねっ!」

いいざま影は左手を挙げ、虚空に円を描いた。よくわからないが、線のような者が空中に見える。指の残像？　ありえない。俺はまた少し近づいた。影はなめらかな仕草でその円の内側に三角形を二つ描き出す。六芒星だ。理由はわからないが、彼の手の動きに従い、空中にどす黒い線が残る。これが魔術なのか。と、その線から何かがしたたる。街灯の反射光が線を照らし出した。あれは…血、空中に血でかけられた魔法陣！？

「お笑いね」

恵利子は言った。先ほどの劇場を秘めた声とは違って変わって、退屈そうだ。

「しょせんは外道の技を使わなければならない程度の小者。その魔法陣も欠陥だらけ」

「け、そんなこと言って、手も出せないくせに」

「単に待ってあげてるのよ？　描き上げないと何も始まらないんですよ？」

「ほざけっ！」

影は続けて円の内側に文字を並べていく。俺には読みとれない文字が円の内側にびっしりと並んでいく。

「待っててあげたけれど…、そろそろタイムアウトね。だいたい、陣から血がたれているなんて、素人を脅すにはいいかもしれないけど、陣の力を殺ぐだけ。その程度のコントロールもできないの？」

恵利子も相手と同じように左手を挙げた。だが、彼女はそれ以外の動作はしない。手のひらから周りの闇を上回る何かが現れる。色は漆黑。大きさは、ゴルフボール程度か。

「その陣はこれに耐えられる？」

その球体から、紫色の光がほとばしった。轟音。数メートルも離れていない陣にその光が突き刺さる。陣が砕け散る。その様子はさながら、ガラスの上に書いた図をガラスごと砕いたかのよう。

「雷？」

俺は呟いた。

別の世界

破壊されたのは魔法陣だけではなかった。影もそのまま吹き飛ばされ、まどつていた黒い衣装がずたずたになっていた。それまで気づかなかったが、頭にもフードか何かをつけていたらしい。影の素顔が明らかになる。特徴もないどこにでもいるかのような男。髪は手入れをしていないかのようにバラバラにのびている。口元にはべつたりと赤黒いもの。恵利子が先ほどから言っている血だろうか。

「お、俺の陣が」

男がうめくように言う。恵利子はからかうような表情でそれに答えた。

「あらあら。さっきはなかなか偉そうなことを言っていたのにね。あなたの力はその程度よ。他人の血で補充したところで、魔力量はともかく、腕そのものは変わらないものね」

「く、くそお」

魔術師は目の前に倒れている人のところに飛びついた。のどに手をかざす。と、のどがぱっくりと割れ、血が噴き出した。血をつかみ取り、恵利子に放った。彼女は左手を少し下げる。降りかかった血しぶきの軌道が変わり、血はすべて漆黒の球体に吸い込まれる。

「つまらない」

恵利子の言葉とともに、球体が魔術師の方にふわりと動いた。そいつが反応しないうちに、胸に球体がぶつかる。次の瞬間、そいつの身体が異様にゆがんだ。掃除機で広げた新聞紙を吸い込もうとしたような感じといったらいいのだろうか。球体の方に奴の身体がゆがみ、吸い込まれる。たぶん数秒とはかからなかっただろう。

恵利子が本当につまらなさそうな顔で戻ってきた。

「終わったわ」

「終わった…。確保したということか？」

「ええ」

「どうやって?」

「私の力でね。それより、二宮に電話してくれるかしら。簡単な報告をしてくれるだけでいいから」

「わかった。それより、あの倒れている男はどうする?」

「残念ながら、彼はもう死んでたわ。それも含めて二宮に連絡して。うまくやってくれると思う」

また俺たちは車に乗り込んだ。

「家まで送つたらいいの?」

「いや、車が二宮のところにあるし、はるかも置いてきてる。屋敷に戻ってくれば」

「わかったわ」

動き出してしばらくは二人とも沈黙していた。聞きたいことはたくさんあったが、聞いていいものかためられたのだ。しかし、黙っていることもできなかった。

「なあ」

「何かしら?」

「どうやって捕獲したんだ? あいつはどこへ行ったんだ?」

「私の力についてどの程度知ってるの?」

「前にも何回か見たが、正直よくわからん」

「私の力は黒点^{ブラックハート}。これは、あらゆるものを格納でき、また後日取り出せる扉を作る能力」

「ふむ、するとそいつを捕獲したというのは」

「そう、その扉の中にしまい込んだ、といつてもいいのかしら」

「しまい込んだものは、どこへ行くんだ?」

「わからない」

「わからない?」

「調べたことがないし、おそらく調べてもわからない。私にいえるのは、どんなものでもしまい込めて、どんなものでも取り出せるということだけ」

「さっきの奴に後から聞いたらしいんじゃないのか？」

「できれば…ね」

「どうということだ？」

「人間をしまい込んだことはほとんどないんだけど。取り出した後はまともじゃなくなっていることが多い。彼は魔術師だし、精神力は常人よりあるでしょう。もしかすると、“向こう側”のことを聞けるかもしれないわね」

「…」

その考え方は、豪快というべきか。俺は何と言っているのかわからなくなった。

「まあ、おそらくは何もわからないでしょうけどね」

別の世界（後書き）

ご存じの通り、ネット小説ランキングにエントリーしています。ちゃんと更新していると、みなさん読んでいただけるようで、先週とランキングが違いますね。

これからもがんばりたいと思いますので、よろしければ投票よろしくお願いします。

声なき声

俺は大学にいた。昨晚帰ってから、家で一眠りすると、どうしようもなく外に出たくなつたのだ。そんな気分でそもそも大学に行くこと自体が間違っているような気もするが、仕方がない。

車を駐車場に止め、学部に向けて歩く。何となく彩華のことを思い出してため息をついた。どうフォローしたらいいのか。

「よう、翔一郎」

いつかも聞いたような声が出た。にっと笑う仕草も同じ。研究室の仲間にして、実際にはもっと複雑な関係の宮雪早苗である。廊下のベンチに座っている。休憩しているのだろうか。俺も笑いかえずと、ベンチの隣に座り込んだ。とりあえず、研究室に到着する前に邪魔が入ったが、そもそも研究室に行きたかつたわけでもない。よしとしよう。

「実験は順調か？」

「まあまあかな。あたしの心配なんかより、自分はどうなってるんだ？」

「ぼちぼちか」

「嘘つけ。四年生にもなつて留年はもつたないぞ。大学院に行くつもりがないにしても、普通に実験さえしていれば、卒業はできるんだからな」

「まあな」

俺はベンチのそばの灰皿を見つめた。たばこは特に吸わないのだが、こういうときには吸ってみたいとも思う。

「何を見てるんだ、この不良」

「不良つて…高校生か、俺は」

「ほら、これをやる」

早苗は缶コーヒーを渡してくれた。

「いいよ」

いいというほどではないが、車が流れていくのが見える。またも彩華のことを思い出した。

「いつからだったかな」

早苗がぼつりと言った。

「…」

「昔はいつも一緒にいた。昼も夜も一緒に」

「…」

「でも、今はこうやって話をするのですら、お互いに気を遣ってる。気を使い出したのはいつからだろうか。つい最近まで、恋人同士ではなくとも、気を遣わずに話していたような気がする。

「翔一郎と会うことも滅多にないし」

「…」

この間から早苗は積極的だ。こいつとなら、気楽につきあえる。

同世代で同感覚で、何でも分かり合えた。だが…。

料理が来る。俺たちはナイフとフォークを取り上げた。またも沈黙のまま時が過ぎた。食べ終わる。早苗が飲み物を注文した。

「すまん、ちよつと長居しすぎた」

「え…!？」

俺は早苗の問いかけを無視して立ち上がった。財布から金を取り出し、前に滑らせる。

「釣りはいらない」

俺は早苗を見た。座ったままだ。

「じゃあ、またな」

微笑むが、早苗の表情は硬いままだ。俺はそれを見ないようにして、店の入り口に向かった。ドアに手をかけようとすると、ドアが向こうから開いた。男が立っていた。何とはなしに、その男を見つめた。背は180cm以上あるのではないだろうか、茶色い髪を肩のあたりまでざつと流している。顔つきは冷ややかで、俺を見ているのか見ていないのかよくわからない表情だ。もとより他人。俺は横に避けた。男は軽く会釈して、レストランの中に入る。俺は男の

向かう先を何気なく眺めた。男は少し中を見回した。すぐにカウンターの方向に向かう。そこそこ空いているのにもかかわらず、男は早苗の方に歩いていく。

「ここ、空いてますか？」

男の問いかけの声を背に、俺は店を無理矢理抜け出した。

声なき声（後書き）

ん、重いっ。

なんか当初のイメージと全然違う気がします。

近々、また元の路線に戻る予定。

でも…、相変わらずラブコメとはとうてい言えないな（苦笑）

夜と彩華

夜。俺は帰ってから、家の電気をつけないまま、ぼーっとしていた。あまり腹も減らないし、何かしているわけでもないから、電気は必要ない。むしろ暗闇が心地よかった。特に何かを考えているわけでもなく、いろいろなことが頭をよぎる。早苗のことや彩華のこと、仕事のことや自分の力のこと。

時間がどのくらいたったのだろうか。帰った時間もすでに薄暗かったが、すでに夜のとばりが降りている。窓の外から差し込んでくる月光のみが部屋の中を白く照らしている。

俺ははっとした。何か音が聞こえたような気がした。窓の方を見る。いつもの窓。立ち上がって近づいてみた。ノックの音。飛びついて開けてみる。

「きゃっ」

彩華がのけぞった。ほおをふくらませる。

「シヨウ、ひどいつ」

「お、おまえ」

「ん、なあに？」

「どうしたんだ？」

「どうしたって…何が？」

彩華はこちらの窓枠に手をかけ、小さくかけ声をかけながらこちらに入ってきた。俺は半分呆然とそれを眺めていた。

「…何してるの？」

彩華が下からのぞき込んでいるのに気づいた。今度は俺がのけぞる。彩華はけらけらと笑った。

「へーんなシヨウ」

「悪かったなっ」

彩華に背を向ける。

「飲み物入れてやるよ。下に降りよう」

「えへへ、ありがと」

彩華が歩き出そうとしてつまずく。俺はあわてて抱き留めた。

「暗いなあ」

「す、すまん」

「でも、すぐに助けてくれたから、許そう！」

俺は彩華をそつと押しやって、手を差し出した。彩華がつかまってくる。俺は電気をつけたが、手を引いたまま階下に降りた。ソファに彩華を座らせると、飲み物の準備をしようとする。

「何がいい？」

「ホットミルクある？」

「ああ」

それなら簡単だ。ミルクパンを取り出して、牛乳を適度に温める。大きなマグに入れ、ついでに自分も同じものを準備。彩華のところに持っていった。

無言で呑んでいる彩華を眺める。マグが大きいせいで、彩華の顔が半分隠れている。と、彩華がちらりとこちらを見た。

「なんか、今日のシヨウはとっても優しいね」

「そ、そうか！？」

「うん、そう思う」

「ま、まあな。海であんなことしてしまったし」

「はるかさんのこと？」

「ああ」

「あれは偶然なんだよね」

「まあな」

「じゃあ、許そう」

「今日は許してもらってばかりだな…。ありがとっな」

夜と彩華 2

彩華は立ち上がり、つて窓辺に行つた。繁華街とも大通りとも遠くにあるこの家は、窓の外は街灯くらいしかなくない。ごくたまに車が通るくらいか。家の中の光とのコントラストのせいで、闇に彩華の顔が照らされているように見える。表情はほとんど見えない。

「そう…、でも…」

外を見つめる彩華。俺は先ほどの気分が舞い戻ってきたように感じ、声が出せなかつた。

「ちよつと寂しくてね。わがまま言つちやつたかな」

彩華はくるりと回つて俺の方を向いた。にこりと笑う。

「だけどね。そんなことばかり言つていたら、はるかちゃんに取られてしまうかもしれないしっ」

「は…!!?」

「はるかちゃん、かわいいもんね」

「あいつはただの仕事なかま…」

「仕事…?」

「あ、いや」

「仕事なのに海で?」

「い、いや…」

彩華はくすくすと笑い、こちらに戻つてきた。ぽすんとソファに座る。

「いいのいいの。仕事仲間か何かわかんないけど、親しい人と遊びに行くくらいするよね」

「そ、そうだよな」

なんか俺は押されつぱなしだ。以前とは立場がすっかり逆転している。

「…海に、二人で…ね?」

「あ、いや。そ、それは」

しどろもどろにしか答えられない。彩華はじつと俺を見ていたが、ふと笑顔になった。

「う…そ…！ こんなことばかり言ってたら、嫌われちゃうもんね」

ソファを立ち上がって、こちらに来る彩華。

「怒ってばかりいると、縁遠くなっちゃうと思うの。だから…」

下からのぞき込んできた。何回もされたこの仕草。しかし、今は何もかも違って見えた。

「ね…？」

彩華が瞳を閉じた。俺もそつと手を伸ばした。

と、急に音楽が流れ始めた。俺はびっくりとして側を見た。俺の携帯だ。彩華に目を戻すと、彼女も目を開いてこちらを見ていた。二人で苦笑いする。携帯の画面を見ると、二宮の文字が。

「まいったな。仕事場からだ」

「こんな時間に？」

「昼夜があまりないときがあるからな」

「変なバイトじゃないよね？」

「もちろんだ」

彩華の言っている意味では変ではない…はずだ。

「あゝ、もうこんな時間か。家に戻るね」

「そうだな。あまり遅いと明日が大変だ」

「仕事もあまりやりすぎないようにね」

「わかった」

彩華と二階に上がっていく。彩華はいつもの通り窓から静かに自分の部屋にわたっていった。部屋にはいると、こちらを向く。

「じゃあ、また明日ね」

二本の指を唇に当て、こちらを向けて振る。俺も笑いかえして手を振った。

「じゃあ、また明日な」

彩華が窓を閉めるのを見てから、俺も窓を閉める。なんだか心が

温かった。

「ちよて…」

とつに切れている携帯を取り出す。二宮にかけ直すことにした。

謎の電話

「さて、今日の仕事だが」

二宮はいつもの通り、淡々と説明を始めた。全員にコピー不可、事後消却の書類を渡す。

今日は全員集まっている。集合日なのだから当然か。俺も淡々と書類をのぞき込む。特に問題のない仕事。俺たちの中の一人か二人で十分にクリアできそうなものが数件。つまりは、至って普通の日常だということだ。少なくとも俺たちにとっては。

目標の情報などを読んでいると、不意にポケットから音楽が流れる。もちろん携帯電話という奴だ。この会合は夜中なので、人付き合いが決していいわけではない俺に電話がかかってくることは珍しい。ほとんどなかったもので、マナーモードにすることをすら忘れていた。仕方がないので、携帯を取りだして画面を見た。見かけない番号だ。一瞬切ろうかどうか悩んでから、立ち上がる。歩きながら通話ボタンを押してみる。

「もしもし」

「サヤマ…シヨウイチロウ…」

「はい」

「狭山翔一郎…だな？」

「その通りですが」

「君が通っている大学の裏側に山があるのは知っているはずだ。明日、夜の11時にその裏山の登り口に来い」

「は？ どういうことだ？」

「来ればわかる、来なければ…おまえが親しくしている女がいるだろう…？」

「それは脅迫か？」

「いや、情報提供…と受け取ればよいのではないかな？」

「…まあいい。とにかく話は聞いた」

「説明は以上だ。明日のことは忘れずにな」

「それはこちらの勝手だ」

俺は携帯を切り、ポケットにしまった。顔を上げると、はるかがこちらに来ており、じつと俺を見つめていた。

「なんだ？」

「何の電話？」

「なんだっていいだろ」

「なんかキョーハクとか聞こえたような気がする」

「気のせいだ」

俺ははるかをちょっと乱暴に押しつけ、自分の席に戻ろうとした。向かいに座っていた恵利子が不思議な表情で俺を見つめた。

「問題があるんだったら話した方がいいわよ？」

「あるんだとしても、俺の問題だ」

「やあれやれ、おこちゃまだねえ」

長谷川が混ぜ返してきた。椅子にだらりと腰掛け、見るからにやる気がなさそうだ。

「自分だけの問題と言いつ切るのはいいいけどよ。それが仕事に差し支えちゃ困るんだぜ？」

「そうはならない」

「さあて、そううまくいくな。サラリーマンなら不意に失踪したところで代わりはいくらでもいるかもしれん。しかし、俺たちは少数の特殊能力者のチームだ」

「だから？」

「代わりがいるとしても、少なくともそう簡単にはみつからんってことだ」

長谷川が立ち上がり、のびをした。そして、底光りする目で俺を見すえる。

「要するにだな。日常生活はともかくも、トラブルならな、俺たちにも関係がおおありってことなんだよ」

俺は目をそらし、二宮に先ほどの書類を投げた。

「書類は読んだ。処分しておいてくれ」

「…で？」

「もう帰ってもいいか？」

「きちんと読んだのならかまわん。仕事に私情を持ち込むな」

「言われなくても」

俺は仲間に背を向け、部屋を出た。はるかも含め、全員が同じ表情をしていたような気がしたが、俺は振り返らなかった。

女…そして衝撃

翌日。指定された時間の30分ほど前、俺は大学に車を置いて裏山に向かっていた。携帯の音が誰なのか、正直言ってもわからない。しかし、あの声を無視してはならない。そう思わせるだけのものが、あの短い対話の間にあった。口調だろうか、それとも…？

大学がいかに広いといっても、裏山はすぐだ。山の向こう側は農学部の畑や牧場などがあり、山といっても特に険しいものでもない。ハイキングで上れる程度のもののだが、行楽シーズンでもない今は人の姿を見かけることはないといっているだろう。ただ、一応遊歩道のようなものはあり、入り口はわかりやすいようにゲート状に看板が設置されている。俺はその下に立ち、誰かいないかあたりを見渡した。登り口とはこのあたりを指すはずなんだが。

「いったいこんなところで何をやっているんだ？」
俺はびくりとして振り向いた。

「…早苗か」

昔つきあっていた女。別になんということもないのだが、この場面に出てこられては困る。電話の男がいつ来るかもしれないのだ。指定された時間は間もない。

「なぜここに？」

「研究室からおまえの車が見えたからな。変な方向に歩いていったし、ちよつと興味をひかれただけだ」

「そつえば、この間はすまなかったな。先に帰ってしまった」

「いや、変なことを言った私も悪かった」

早苗はそう言ってこちらに来た。どうやればこの場を取り繕えるかわからない。

『危ない！ 気をつける！』

不意に頭の中に響く“声”。電話の男が来たのか。早く早苗から別れないといけない。

「悪いな、ちょっと今は別の奴に用があつて…」

目の前まで近づいてきていた早苗。背中に右手が隠されている。その右手が引き出されると、その手に握るものは…ハンティングナイフ。早苗はそれを両手で握ると、俺の腹に突きだした。必死でとびすさる俺。しかし、間に合わない。刃の先が俺の腹を割く。衝撃。

「な、なぜ…!？」

腹を押さえつつ、問いかける。

「翔一郎が、翔一郎が悪いんだ」

早苗がうめくように叫んだ。ナイフを振りかざしてこちらに向かってくる。俺は左手でその刃を受け止めようとした。スローモーションのように刃が振り下ろされる。と、その刃が急に止まった。

「…?」

早苗が手を止めたわけではない。彼女は顔を真っ赤にしてナイフに力を込めている。しかし、ナイフは誰かに押さえられているかのように、ぴくりとも動かなかった。

俺はどうしたらいいのかわからないまま、彼女を見つめた。改めて見てみると、表情が変だ。目の焦点は合っていないし、口からわずかに泡を吹いている。どうにかしてしまったのか!?

そうしているうちに、ナイフが動いた。見えない手が動いているかのように、早苗の手からナイフがもぎ取られる。ナイフはそのまま放物線を描き、森の奥に飛んでいった。早苗はそれを見るでもなく、急に力を失ったかのように地面に倒れ伏した。

俺は腹の傷を確かめた。“声”のおかげで多少警戒していたのが幸いし、傷はそれほどでもないが、さすがに痛みはそれなりにある。俺は痛みをこらえながら、早苗を抱え上げた。

俺はまた元の登山口の方に戻ってきた。早苗を運んでいった大学の診療センターでは、むしろ俺の傷の方に関心が深かったようだが、簡単な治療以上は拒否した。説明するのも不可能だし、そんなことよりも気になることがあったのだ。俺は戻りざま、大学キャンパス

のビルを注意深く眺めた。探していた姿は目立たない建物の屋上にあった。俺と視線があつたそいつは、軽く手を挙げる。そいつの名は、長谷川志郎^{はせがわしろう}。

「まったくよ、おまえは……」

「……」

「俺が来ていなかったら、死んでたんじゃないか？」

相変わらずの一言一言を区切る言い方だった。この男は腹筋が割れているような外見に似合わず、物質遠距離操作の能力の持ち主なのだ。視界内であればどこでもいいらしい。一度望遠鏡越しの操作を見たことがあるくらいで、こいつの能力の射程距離はとほうもない。視力もいいし、ビルの屋上からナイフをコントロールする程度はお手の物だろう。

電話再び

「それにしても、脅迫されている相手を病院まで運ぶなんて、不思議な奴だな」

長谷川が興味なさそうに言った。

「おまえ、そんなに女に甘いやつだったか？」

「こいつは特別だ。それに、こいつに脅迫されたんじゃない」

「じゃあ、例の電話は？」

「男の声だったからな。正体は知らんが」

「さっきの女は何者だ」

「…研究室の仲間だ」

「なぜ襲われた？ 痴情のもつれか？ 浮気でもしたか？」

長谷川はにやにやし始めた。

「そんなわけあるか。だいたい、その電話で指定された時間と場所にあいつはいたんだぞ。単なる偶然の可能性だってあるが、そう思うか？」

「確かに」

長谷川は辺りを見回した。学生が何人かいるくらいで、怪しい者はいない。とはいえ、相手の姿を知らないのだ。

「まあ、そんなことはともかくだ」

長谷川は俺をじろじろ見た。

「おまえ、腹とか刺されてなかったか！？」

「まあ、それほど深くはなかったからな。血は結構出たが」

「おま…それは浅いとはいわんぞ！」

「かすり傷だ。もう治った」

「…」

長谷川は俺のシャツの血のシミをじっと見た。

「さっきのを運んでいったのに、良く医者にも言われなかったな」

「医者に見られなかったからな。あいつを置いてきただけだ」

「しかし、尋常じゃないぞ。腹を刺されて一時間もたたないうちに治っただと…」

「まあな、元々俺は傷の治りが早いらし…」

俺の携帯が鳴り出した。取り出して画面を眺める。登録されていない番号。この間の男のものだ。一瞬画面をにらみつけてから、通話ボタンを押す。

「もしもし」

「狭山…翔一郎」

紛れもない、あの晩の男の声。怒りに目がくらむ。

「…おまえが現れると期待していたんだがな」

声を絞り出すと、相手は冷たく笑った。

「私はそんなことは言っていない。良く思い出してみることだ」
「ぐ…」

俺は一瞬黙り込んだが、すぐに言葉を続けた。

「とにかく、言うとおりにしたぞ。これからどうなる？」

「言うとおりに…にはしていないようだがな」

のどの奥で笑うような声。

「おまえはどうも自分の都合の良いように、私の言葉を解釈しているようだな」

「それはおまえの方だろうが！」

「ともかく、これはペナルティに値する」

「どうするというんだ！」

「それは、そのうちわかる」

またも笑いを漏らすと、携帯は切れた。俺は携帯を地面に投げつけようとしたが、思いとどまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2908e/>

夢の声とあいつと俺

2010年10月8日11時38分発行